

ISOM Japan NEWS Letter

17thICOM における日本の役割

2014年11月1・2・3日の3日間、第17回国際東洋医学学会学術大会(17thICOM)が台湾台北市の台大醫院國際會議センター(NTUH International Convention Center)にて開催されました。

この号では、台湾の学会本部からの要請により開催された、日本の症例報告のセッションの様子と、いくつかの招待講演の様子を掲載します。



日本セッション「症例報告」

第2日(11月2日)00:20~00:00は「伝統医学と文化」というテーマで、日本の漢方医学の代表的な症例報告の一部が紹介されました。

このセッションの構成は以下の通りです。



座長をつとめる高山先生と元雄先生

座長：元雄良治(金沢医科大学腫瘍内科学)

高山真(東北大学漢方内科)

演者：小川恵子(金沢大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学)

貝沼茂三郎(九州大学病院総合診療科)

岡本英輝(千葉大学大学院医学研究院先端和漢診療学講座)

福岡裕二(医療法人社団日高会 日高病院)

トップバッターは金沢大学の小川恵子先生で、先生は、「舌痛症・咽喉頭異常感症に滋陰至宝湯が有効であった3例」というタイトルで、

小川恵子 1、小川真生 2、白井明子 3、吉崎智 4

咽喉頭異常感症は、舌、唇、咽喉頭に灼焼感、違和感、疼痛、不快感、ひりひり感などの異常を訴えるが、器質的病変を局所に認めないもの、と定義される。罹患率は報告によれば0.7-1.5%である。咽喉頭異常感症患者の20%以上に口腔粘膜乾燥感があると報告されており、陰液不足と考えられている。咽喉頭異常感症には精神疾患の合併が30-72%に報告されており、特に鬱病と不安症が多い。咽喉頭異常感症の診断基準はなく、病因も不明である。ベンゾジアゼピンもしくは三環系抗うつ薬が治療の主体となるが、有効性は患者による。このように診断も治療も困難であるのが現状である。

滋陰至宝湯は『万病回春』巻之六・婦人虚勞門収載の中国・明時代(1368~1644)の方剤

で、気鬱を伴う慢性咳嗽や諸々の婦人病に有効であるとされている。滋陰至宝湯は14種類



の構成生薬から成るが、滋陰、清熱、理氣し、脾胃の機能を改善する働きがある。今回われわれは、本方剤が奏功した舌痛症、咽喉頭異常感症の4症例を経験した。全症例に口腔粘膜乾燥感を認めた。ベンブジアゼピンや二環系抗うつ薬の副作用がある場合や、反応性の悪い場合に滋陰至宝湯は有効な選択肢となる。この報告を元とした更なる臨床研究が必要ではあるが、日腔もしくは咽喉乾燥感、粘桐な痰、気鬱の症候の一つである腹部右側の鼓音を認める舌痛症、咽喉頭異常感症には、滋陰至宝湯は有効な処方となり得ると考えた。

大柴胡湯合橘皮枳実生姜湯が有効だった好酸球性肺炎の一例 貝沼 茂三郎

緒言：好酸球性肺炎はステロイド治療により速やか軽快るが、減量、中止により再発することもある。今回、私どもはステロイドの減量・離脱に漢方治療が有効だった症例を経験したので報告する。

症例：43歳男性。X-3年咳嗽・喀痰・呼吸困難を自覚。近医を受診。低酸素症を認め、肺炎と診断され、抗菌薬投与を受けたが、無効。入院精査にて好酸球性肺炎と診断され、PSL 30mg/日内服開始となった。X年8月 PSL7.5mg/日まで漸減された時点で、呼吸困難、咳嗽、喘鳴、喀痰が出現し、肺炎が再発。同年9月より PSL20mg/日まで再増量となった。

同年10月初診。柴胡桂枝湯合桂枝茯苓丸料を開始。2ヶ月後 PSL20mg/日まで減量後より鼻閉が出現。便秘、高度の右胸脇苦満を目標に大柴胡湯へ転方。鼻閉は改善し、5ヵ月後 PSL7.5 mg/日まで減量。減量後から湿性咳嗽が出現したが 大柴胡湯合橘皮枳実生姜湯に転方。その後 PSL mg/日の漸減・中止が可能となり、現在 PSL 中止後6ヶ月が経過しているが、好酸球も増加せず、漢方治療のみで経過良好である。

考察および結語：橘皮にはヘスペリジンが含まれており、橘皮枳実生姜湯には、抗アレルギー作用を有する可能性が示唆された。



がん患者の諸症状に対する漢方薬によるマネジメント 岡本英輝^{1,2,3}、並木隆雄¹

日本人の2人に1人はがんを発症し、3人に1人の直接死因はがんである。近い将来、直接死因ががんとなる割合は2人に1人へ増加すると予測されており、がんに対するさらなる治療法の開発はもとより、がん患者の闘病を支え QOL を保つための対策が国家の急務となっている。

漢方医学は、西洋医学では対応しきれない様々な症状に対して有効であることが多く、特に病期に関わらずしばしばがん患者の QOL を劇的に改善する。そのため、千葉大学医学部附属病院緩和ケアチームでは2006年の発足当初から、そして千葉県がんセンターでは2008年から漢方専門医を配置し、がん患者の様々な症状の治療にあたっている。対応した症状は多岐にわたるため、カテゴリーを設けて分類しその成果をまとめるのは非常に困難であるが、このシンポジウムにおいては、①乳がん患者のホルモン療法における漢方薬の役割、②がん患者の食思不振に対する十全大補湯の有効性についての臓器別分類による比較検討について、個々の症例を交えながら紹介したい。



群馬県高崎市の日高病院の福間裕二先生は、「泌尿器科領域における漢方診療の過去・現在・未来」と題して、

日本では 9 割を超える医師が漢方薬の使用経験があり、泌尿器科領域では悪性腫瘍、尿路感染症、尿路結石、排尿障害、男性不妊、男性更年期障害など多くの分野で漢方薬の有用性が報告されている。

実際に手術を行う医師が日常診療の中で漢方薬を使用することができるのが、日本の漢方診療の大きな利点であり、伝統的な証による漢方処方だけでなく、手術中の所見や、局所で起こっている病態を推測することにより漢方処方を選択する事が可能となる。

近年、医療技術の進歩により、前立腺癌に対するロボット手術や重粒子線治療、尿管結石に対する軟性尿管鏡を使った内視鏡手術に代表される低侵襲治療や、新しい世代の治療薬が開発されると共に、それに伴う特徴的な合併症も見られるようになった。このような合併症に対しても、漢方薬が有用な場合がある。演者は尿管結石の内視鏡手術の周術期に柴苓湯を使用する事により、尿管粘膜の炎症や浮腫を軽減させ、治療成績の向上につながるかどうか検討を行っている。

今回は症例報告を通じて、泌尿器領域漢方診療の過去。現在を理解し、未来の漢方薬の可能性について論じてみたい。



17th ICOM および台湾印象記

17th ICOM(国際東洋医学会)の Banquet dinner (晩餐) に参加して

明治国際医療大学 和辻 直

11月2日18時30分から Banquet dinner (晩餐) が開催されました。開演前まではロビーで多くの参加者が溢れておりました。会場に入場すると 10 席のテーブルが 20 卓以上ほど用意されていました。広々とした会場は直ぐに満員となりました。17th ICOM の大会長等からの挨拶があり、乾杯した後に開演しました。料理は中華コースであり、美味しい品が次々にテーブルに運ばれました。

この宴会の余興では、男女のプロ司会が場をより盛り上げる英語を交えて話していました。余興は太鼓の演奏、マジックショー、歌などがありました。その中でマジックショーでは特に盛り上がりました。最初はマジックショー

では仮面をかぶった者が登場し、音楽にあわせて踊りながら、仮面の紋様を一瞬に次々に替えていく、マジックでした。マジックが舞台から降りて、テーブルに回り、仮面を一



左写真：ICOM事務局の陳行慧先生が箱に入った状態

右写真：箱が腰の位置で分かれた状態

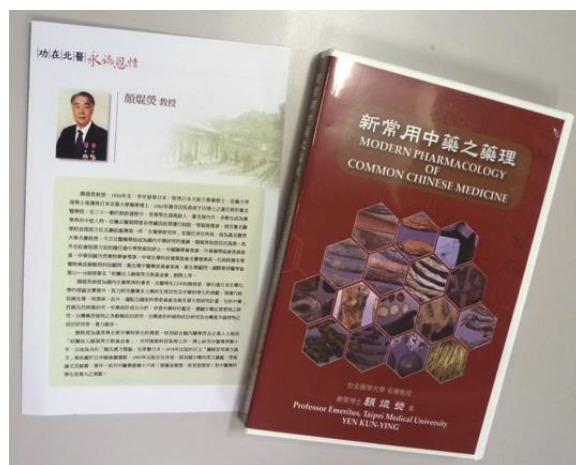
瞬に変わることに皆は驚いていました。次に登場した別のマジシャンは剣を口に入れる大道芸を行いました。その後、ICOMの要人4人を壇上に上げて、テーブルクロスのような布を見せて、何も仕掛けがないことを確認させた後に布の角を4人に持たせ、マジシャンが手に入れて混ぜると徐々に穀が増えていき、やがて花びらに変化するというマジックを披露していました。

その後にICOM事務局の陳行慧先生を壇上に上げて、彼女を壇上にある箱（顔のところは空いている）のような箱に入れました。箱を1回転させた後にウェストあたりの位置で箱を二分して、上半身と下半身が分かれるというマジックを披露した。そのマジックショーを目の当たりして、会場は大いに盛り上がりました。

さらに経穴人形が立っているテーブルを浮遊させ、会場から鍼麻酔の研究で著名な林昭庚先生を壇上にあげて、マジシャンと机を浮遊させて、会場を沸かせていました。



舞台上の林昭庚先生とマジシャン



顔焜熒先生のDVD

また宴会の途中には、今回のICOMで学会貢献名誉賞の受賞された顔焜熒教授(ISOM 荣誉理事/台北医学大学荣誉教授)と関係者が各テーブルに来られ、顔先生が作成された『新常用中藥之藥理』(Modern Pharmacology of Common Chinese Medicine)のDVDを配られておりました(内容は645ページのPDF本文と602ページのPDF付録(中藥成分の化学式の掲載))の貴重な資料をいただきました。

会場はその後、懇親場として大いに盛り上がりました。盛り上がったBanquet dinnerは21時15分頃にお開きとなりました。

ISOM Japan ニューズレター 2014 No. 2
 発行日 2015年12月28日
 編集者 ニューズレター編集委員会
 発行者 安井廣迪
 発行所 株式会社ジーエー企画
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-7
 巖松堂ビル10F
 Email ga-takahashi@lake.ocn.ne.jp
 ウェブサイト <http://isomjpn.umin.jp/>

国際東洋医学会日本支部 ISOM Japan

東京都千代田区神田神保町1-7 巖松堂ビル10F
 株式会社ジーエー企画内
 TEL. 03-5283-5006
 FAX. 03-5283-5416